

那珂 83

—那珂遺跡群第 172 次調査の報告—

2021

福岡市教育委員会

那珂 83

—那珂遺跡群第 172 次調査の報告—



調査略号 : NAK-172

調査番号 : 1736

2021

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、数多くの文化財が残されています。これらの文化財を保護し、後世に伝えることは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い記録保存に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴う那珂遺跡群第172次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から中世にかけての集落を確認することができました。これらはこの地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後にエムアンドエー株式会社様をはじめとする多くの関係者の方々には、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市博多区東光寺町一丁目400-2、401における共同住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が平成30年2月13日から平成30年3月16日にかけて発掘調査を実施した那珂遺跡群第172次発掘調査の報告である。
2. 発掘調査及び整理・報告書作成は受託事業及び国庫補助金事業として実施した。
3. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は福岡市埋蔵文化財課 山本晃平が担当した。
4. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
5. 本書に掲載した遺構の実測図作成は、山本が行った。
6. 本書に掲載した遺物の実測図作成は山崎賀代子・山本が行った。
7. 本書に掲載した遺構及び遺物の写真撮影は山本が行った。
8. 本書に掲載した挿図の製図は山本が行った。
9. 本書で用いた方位は磁北である。
10. 本書で用いた座標は世界測地系による。
11. 調査で検出した遺構については、通し番号を付している。
12. 本書では陶磁器の分類については太宰府教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類編一』及び森本朝子・片山まび 2000「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』第8号を参照した。
13. 本書に関する記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管され、活用されていく予定である。
14. 本書の執筆・編集は山本が行った。

那珂遺跡群第172次発掘調査基本情報

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	172次	遺跡略号	NAK-172
調査番号	1736	分布地図図幅名	東光寺37	遺跡登録番号	0085
申請地面積	223.07m ²	調査対象面積	133.82m ²	調査面積	124.94m ²
調査期間	平成30年2月13日～平成30年3月16日			事前審査番号	29-2-284
調査地	福岡市博多区東光寺町一丁目400-2、401				

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
3 遺跡の位置と環境	2
第2章 調査の記録.....	7
1 調査の概要	7
2 遺構と遺物	7
(1) 挖立柱建物.....	7
(2) 壇穴住居.....	9
(3) 溝.....	12
(4) 貯蔵穴.....	15
(5) その他の遺構出土遺物.....	15
第3章 まとめ.....	18

挿図目次

第1図 那珂遺跡群周辺遺跡分布図 (1/25000)	3
第2図 那珂遺跡群調査地点配置図 (1/5000).....	4
第3図 那珂遺跡群第172次調査地点調査範囲及び周辺遺構配置図 (1/500)	5
第4図 那珂遺跡群第172次調査全体図 (1/100)	6
第5図 挖立柱建物 01 実測図 (1/80)	8
第6図 挖立柱建物 02 実測図 (1/80)	8
第7図 壇穴住居 016 実測図 (1/60).....	9
第8図 壇穴住居 016 出土遺物 [1] (1/3)	10
第9図 壇穴住居 016 出土遺物 [2] (1/3)	11
第10図 溝 001 実測図及び土層断面図 (1/80・1/40).....	13
第11図 溝 001 出土遺物 (1/3)	14
第12図 溝 002 実測図 (1/80).....	15
第13図 貯蔵穴 017 実測図 (1/20).....	16
第14図 貯蔵穴 017 出土遺物 (1/3)	16
第15図 その他の遺構出土遺物 (1/3)	17

図版目次

- 図版 1 (1) I 区調査区全景 (北西から)
(2) II 区調査区全景 (南西から)
(3) III 区調査区全景 (北西から)
(4) 溝 001 断面 A-A' (北から)
(5) 溝 001 断面 B-B' (北西から)

- 図版 2 (6) 壺穴住居 016 全景 (東から)
(7) 壺穴住居 016 土器出土状況 (北東から)
(8) 貯蔵穴 017 全景 (北から)

- 図版 3 (9) 壺穴住居 016 出土土器

- 図版 4 (10) 溝 001 出土遺物
(11) 貯蔵穴 017 出土遺物
(12) その他の遺構出土遺物

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成29年6月26日付福岡市博多区東光寺町一丁目400-2、401の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課に提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に所在し、周辺の確認調査・発掘調査から遺跡の存在が確認されている。また照会地では平成28年9月1日に確認調査を行っており遺構を確認している。これらから埋蔵文化財課では、遺跡の保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、共同住宅建設において埋蔵文化財への影響を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成30年1月5日付でエムアンドエー株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年2月13日から発掘調査を行い、3月16日に終了した。

令和元・2年度に調査で出土した遺物の整理と報告書作成を行った。

2 調査の組織

調査委託：エムアンドエー株式会社

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成29年度、整理報告：令和元・2年度）

調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課（平成30年度から文化財活用部）

課長 常松 幹雄（平成29年度）

菅波 正人（令和元・2年度）

調査第2係長 大塚 紀宜（平成29年度・令和元年度）

藏富士 寛（令和2年度）

調査庶務：経済観光文化局文化財保護課管理調整係（平成30年度から文化財活用課）

管理係長 藤 克己（平成29年度・令和元年度）

大森 秋子（令和2年度）

松原 加奈枝（平成29年度、令和元・2年度）

事前審査：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課（平成30年度から文化財活用部）

事前審査係長 本田 浩二郎（平成29年度・令和元・2年度）

文化財主事 中尾 祐太（平成29年度）

朝岡 俊也（令和元年度）

山本 晃平（令和2年度）

調査・整理担当：同課

山本 晃平

3 遺跡の位置と環境

那珂遺跡群は福岡平野を流れる御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する。那珂遺跡群が位置する台地はその南東の春日正陵から標高を北に下げながら延びる低丘陵上に立地している。北側には比恵遺跡群が、南側に五十川遺跡が接しており、同じ段丘上に立地している。特に比恵遺跡群は、那珂遺跡群との間に浅い地形があるが、遺構の分布や遺構変遷の様相から、弥生時代から古代においては同一の遺跡群であると考えられており、「比恵・那珂遺跡群」と総称されている。

那珂遺跡群は旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。特に弥生時代から古代にかけては濃密な遺構分布を示している。比恵・那珂遺跡群は 1938 (昭和 13) 年の区画整理時に発見された環濠集落の調査以来、令和 2 年度までに比恵遺跡群で 157 次、那珂遺跡群で 183 次を数える調査が行われてきた。

旧石器時代は、その時期の遺物であるナイフ形石器や彫器、剥片などが丘陵の南東縁で出土しているが、散逸的な分布を示すに過ぎない。

次の縄文時代も早期から晩期前半までは、石鏃や石匙、土器片などが断片的に出土しているが、明確に遺構に伴って出土したものはなく、その有り様は前時代と大差がない。この傾向は、比恵遺跡群においても同様である。

弥生時代になると、その様相は一変する。台地の縁辺部で堅穴住居や貯蔵穴群などの遺構が広がり、閉析谷に面した緩斜面には土器や石器、木器を伴う包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大していく。台地の南西縁では夜臼期から前期前半の二重環濠集落が営まれ、台地中央部の尾根上でも貯蔵穴を伴った環濠集落が営まれている。また北西縁や東縁部にも貯蔵穴群が広がっている。前期後半から中期になると集落域は、縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。弥生時代中期後半から後期には、台地上の全域が集落化する傾向にある。その中には銅劍や銅矛、鑄型の中子など青銅器の生産を示唆する遺物も出土しており、青銅製品の生産に関わる工房群が台地の尾根上に存在することが窺われる。

古墳時代以降になると、那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳、剣塚古墳など前方後円墳が造営される。この時期から集落は台地上に広く展開し、規格性の高い 3 本柱の柵列に囲まれた大型建物群も各所に出現する。特に「記紀」に記載されている「那津宮家」とされる大型建物群が比恵遺跡群の北西部にあり、それら全体として「那津宮家」を形成していたと考えられる。

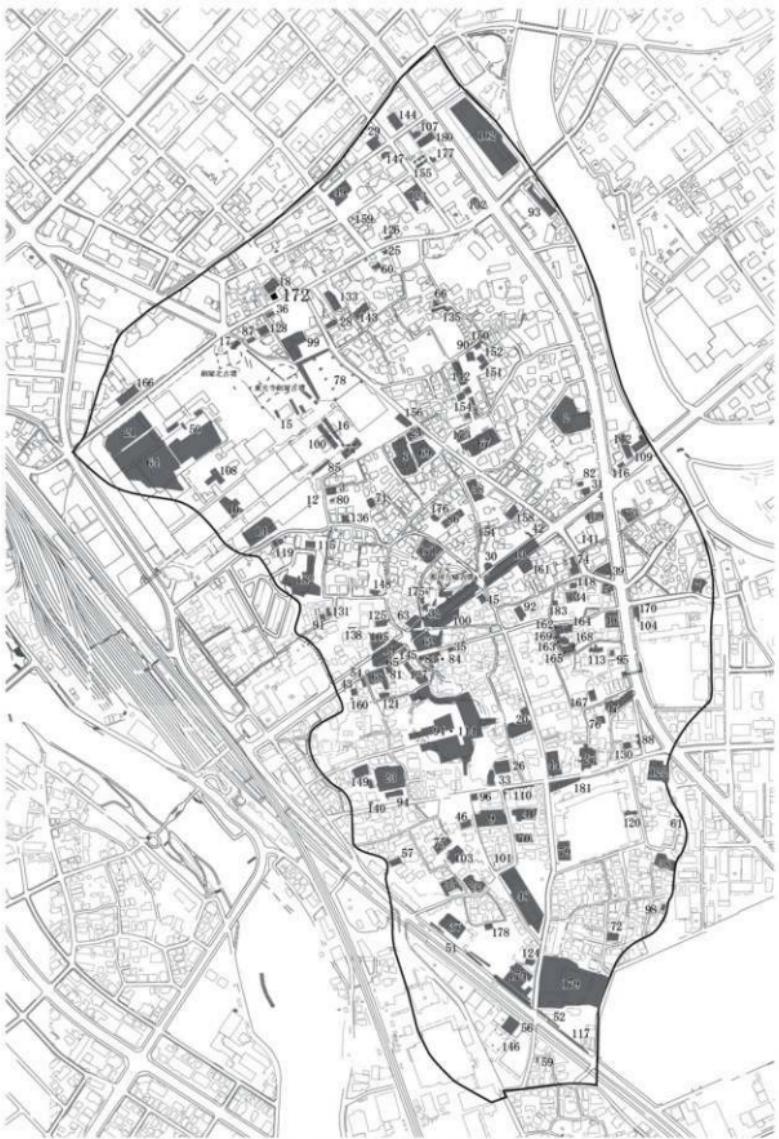
飛鳥時代になると「初期瓦」とされる特異な瓦類を含む 6 世紀末から 7 世紀末の古代瓦が複数地点で出土している。また遺跡の南端部では 7 世紀中頃～末の大型建物ないし二本柱柵列が検出されている。

中世後半期の室町時代から戦国時代にかけて、各所で堀状の大きな溝が掘り巡らされている。これは大内氏や大友氏などの家臣団の知行地との関連が指摘される。このような状況は南接する五十川遺跡などでも見受けられる。



- | | | | | |
|------------|----------|-----------|-------------|------------|
| 1 那珂遺跡群 | 2 比恵遺跡群 | 3 山王遺跡 | 4 五十川遺跡 | 5 東那珂遺跡 |
| 6 那珂君体遺跡 | 7 板付遺跡 | 8 諸岡A遺跡 | 9 諸岡B遺跡 | 10 諸岡古墳群A群 |
| 11 諸岡古墳群B群 | 12 博多遺跡群 | 13 堅粕遺跡 | 14 吉塚祝町遺跡 | 15 住吉神社遺跡 |
| 16 吉塚遺跡 | 17 豊遺跡 | 18 駿東生産遺跡 | 19 東比恵三丁目遺跡 | 20 榎田北遺跡 |
| 21 榎田遺跡 | 22 美野島遺跡 | 23 黄鳥橋遺跡 | 24 上牟田遺跡 | 25 雀居遺跡 |
| 26 府田青木遺跡 | 27 高宮B遺跡 | 28 中村町遺跡 | 29 野間A遺跡 | 30 足方池遺跡 |
| 31 野間B遺跡 | 32 塩原遺跡 | | | |

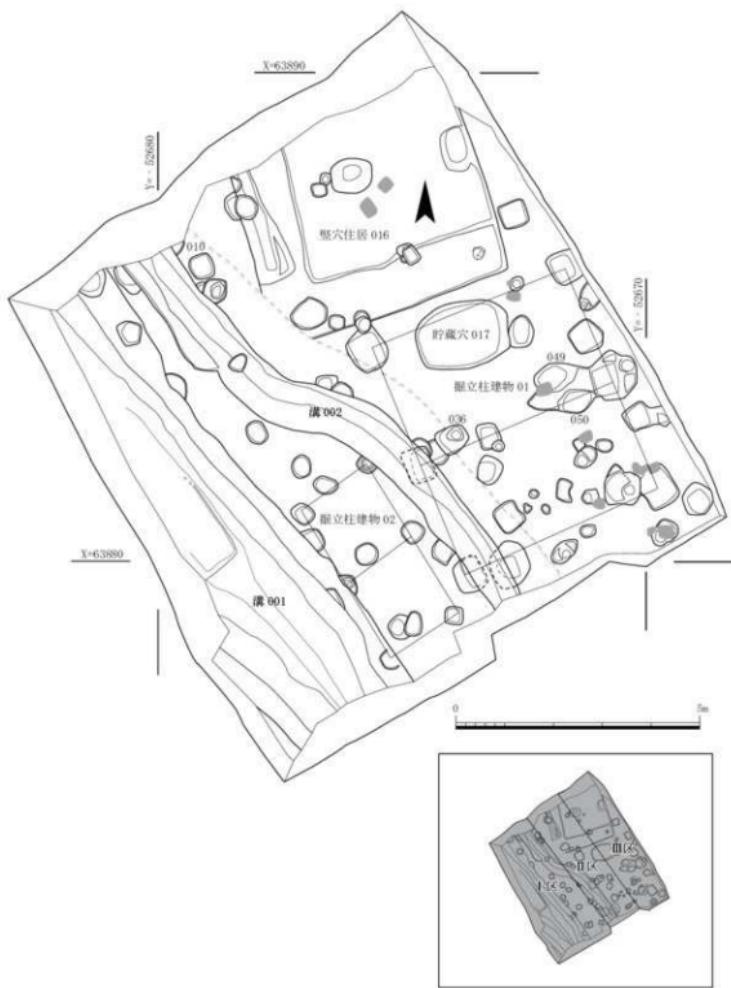
第1図 那珂遺跡群周辺遺跡分布図 (1/25000)



第2図 那珂遺跡群調査地点配置図(1/5000)



第3図 那珂遺跡群第172次調査地点調査範囲及び周辺遺構配置図（1/500）



第4図 那珂遺跡群第172次調査全体図（1/100）

第2章 調査の記録

1 調査の概要

今回報告する那珂遺跡群第172次調査は、福岡市博多区東光寺町一丁目400-2、401に所在する。調査地点は那珂遺跡群の北側に位置する。遺構検出は重機で遺構面上面まで剥ぎ取って実施した。遺構面まではGL-50cm前後である。調査区内は擾乱が少なく遺構が濃く残されていた。ただ調査区のおよそ中央に後世の造成と思われる段落ちがあり、遺構の一部が削平されている。主な検出遺構は掘立柱建物2棟、竪穴住居1軒、溝2条、貯蔵穴1基、他柱穴・ビット多数を検出した。

発掘調査は平成30年2月13日から着手した。まずは重機で遺構面まで剥ぎ取り、並行して発掘調査器材の搬入などを実施した。廃土置き場を確保するために調査区を3分割して調査を行った。まずは西側1/3をI区として調査を行い、2月25日に終了した。次に土砂を反転させてさらに調査区のおよそ真ん中をII区として2月28日から3月6日まで調査を行った。最後に調査範囲の東側をIII区として3月8日から3月15日まで調査を行った。そして16日に発掘調査機材などの搬出を行い、すべての調査が終了した。

2 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに調査検出遺構及び出土遺物について報告する。

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物01（第5図）

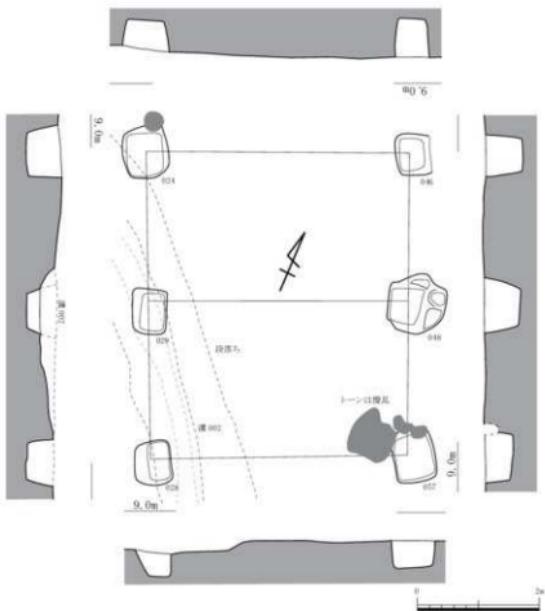
調査区南東側で確認された1間×2間の掘立柱建物である。西側柱穴の一部が後世の段落ちと溝002に切られている。主軸方位はN-20°-Eである。梁行きは約420cm、桁行きは約500cmをはかる。柱穴の平面形は隅丸方形で、一边が約60～80cmをはかる。明確な柱痕跡は確認できなかった。各柱穴の埋土は024が黒褐色粘質土、029がローム混じりの黒褐色～灰褐色粘質土、028が黒褐色～灰褐色粘質土、046が黒褐色粘質土、048が黒褐色粘質土、057が黒褐色粘質土である。

出土遺物 各柱穴の掘方内から土師器片、須恵器片などが出土しているが、いずれも小片および碎片のため図化できなかった。ただ柱穴掘方の平面形や土師器片や須恵器片が出土していることから遺構の時期としては古墳時代から古代が推定される。

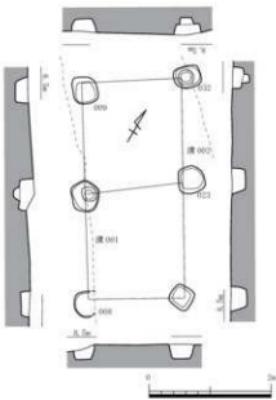
掘立柱建物02（第6図）

調査区南端のやや西側で確認された1間×2間の掘立柱建物である。溝001と溝002の間に位置しており、両方の遺構に切られている。主軸方位はN-30°-Eである。梁行きは約160cm、桁行きは約360cmをはかる。柱穴の平面形はおよそ円形で、径約40cmをはかる。明確な柱痕跡は確認できなかった。各柱穴の埋土は008が黑色粘質土、009が黑色粘質土、023が黒褐色粘質土、032が黒褐色粘質土である。

出土遺物 各柱穴の掘方内から土師器片が出土しているが、いずれも小片および碎片で図化できなかった。



第5図 挖立柱建物01 実測図 (1/80)



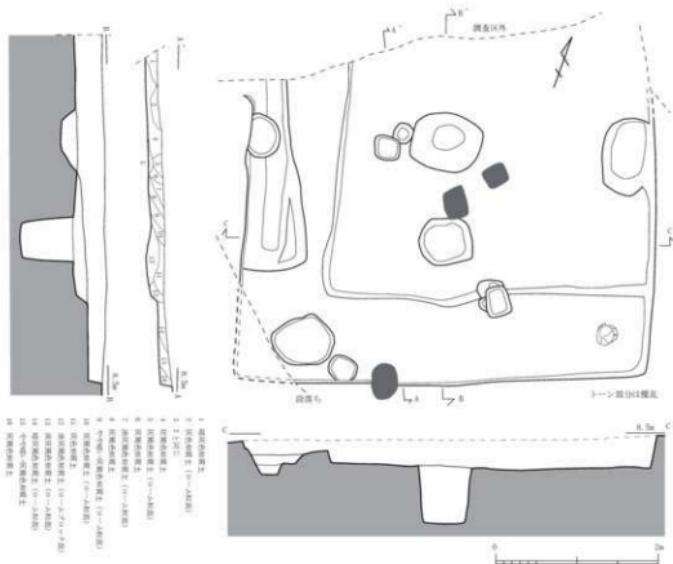
第6図 挖立柱建物02 実測図 (1/80)

(2) 穹穴住居

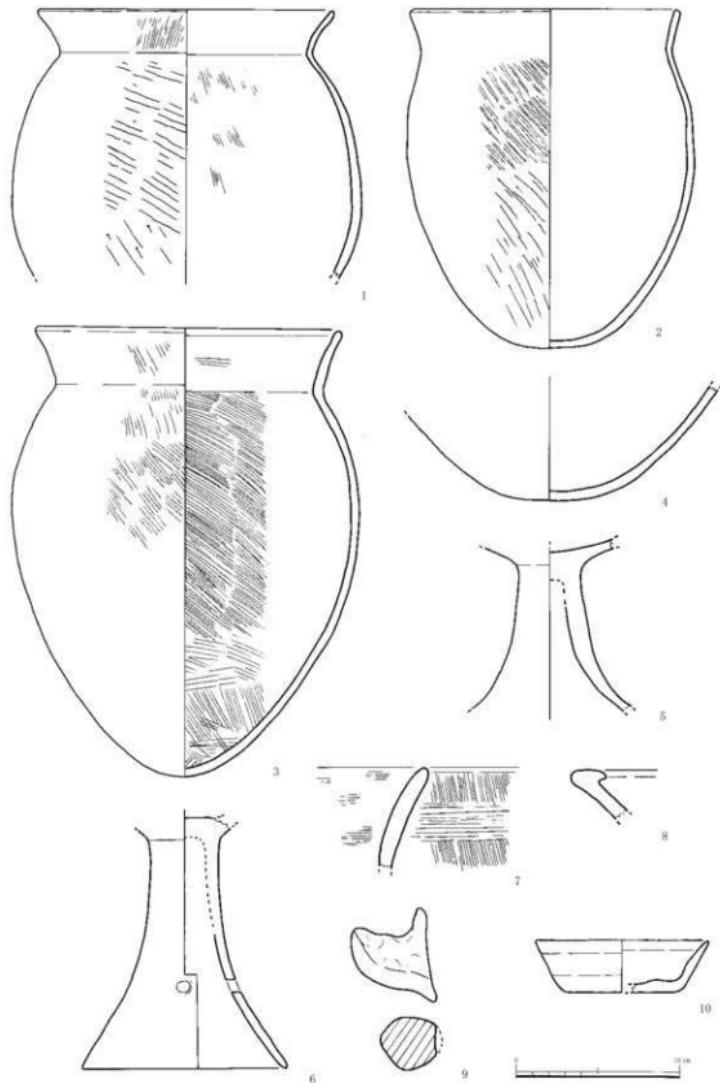
竪穴住居 016（第7図、図版1）

調査区の北側で確認された竪穴住居である。住居の一部が調査区外に延びており、全体の規模ははつきりしないが、一辺がおよそ500cmの方形の竪穴住居と考えられる。確認できる規模は東西長約500cm、南北長約430cmをはかる。またコの字状のベッド状遺構を伴っている。ベッド状遺構は幅約100cmをはかる。また住居南東隅のベッド状遺構にはほぼ完形の土師器の甕が逆さまで置かれていた。壁溝や支柱穴は確認できなかった。

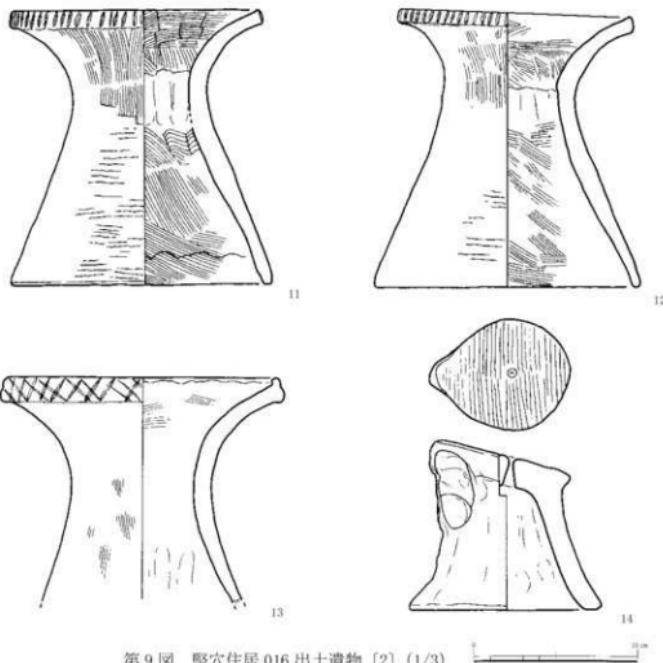
出土遺物（第8・9図、図版3） 1～4は土師器の甕である。1は口径 18.0 cm、残存高 16.7 cm をはかる。外面調整は口縁が磨滅しており不明、胴部上半部がヨコ・ナナメ叩き、下半部がケズリ調整である。内面調整は口縁部が磨滅しており不明、胴部は磨滅がひどいが一部にタテハケが残っている。胎土は 3 mm 以下の石英・長石粒・褐色粒・雲母を含む。色調は淡黄色を呈する。2は口径 16.6 cm、器高 21.0 cm をはかる。底部は丸底である。全体的に磨滅が激しく、特に内面に関しては調整痕が見えない。外面調整は胴部上半部に斜めの平行叩き痕、下半部にケズリ痕跡がある。胎土は 3 mm 以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調は浅橙へ黄橙色を呈する。3はベッド状造構の南東隅に逆さまに置かれていた土器である。口径 18.2 cm、器高 27.6 cm をはかる。底部はレンズ状である。外面調整は磨滅が激しいが、口縁部から胴部上半分にかけてはナナメハケ調整を施す。内面調整は口縁部から頸



第7図 壁穴住居 016 実測図 (1/60)



第8図 堪穴住居016出土遺物 [1] (1/3)



第9図 堅穴住居016出土遺物〔2〕(1/3)

部にかけては磨滅が激しいが、ヨコハケ調整を施していたと思われる。胴部から底部にかけてはハケ目調整を施す。胎土は4mm以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調は黄橙色を呈する。4は底部のみである。底部は丸底である。全体的に磨滅が激しく調整は不明である。胎土は5mm以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調は黄橙色を呈する。

5・6は土師器の高坏の脚部である。5は残存高10.4cmをはかる。器壁が全体的に磨滅しており、調整が不明である。ただ杯部の内面はナデ調整を施していると思われる。胎土は精緻で、2mm以下の白色粒を多く含む。色調は橙色を呈する。6は残存高15.4cm、復元脚部径12.6cmをはかる。脚部に焼成前に穿たれた孔が1か所ある。器壁は全体的に磨滅しており、調整はわからない。胎土は粗く、3mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。

7は土師器の壺の口縁部である。破片のため法量は不明である。外面調整は口縁部からタテハケ→ヨコハケ→タテハケを施す。内面調整はヨコハケ調整である。胎土は1mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色である。8は弥生土器の無頭壺の口縁部である。破片のため法量は不明である。全体的に磨滅しており、調整は不明だが、一部に丹塗りと思われる痕跡があり、丹塗りを施していたと考えられる。胎土は3mm以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調はにぶい黄褐色を呈する。9は土師器の壺の取手である。胎土は5mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。

10 は須恵器の坏である。復元口径 10.6 cm、器高 3.2 cm、復元底径 6.8 cm をはかる。口縁部がやや外反する。底部調整はヘラ切りからナデ調整を施す。それ以外は回転ナデ調整である。焼成は堅緻である。胎土は白色微粒子を極小含む。色調は灰色を呈する。

11～13 は器台である。**11** は口径 15.0cm、器高 16.8 cm、復元脚部径 16.0 cm をはかる。脚部はやや内湾気味で、口唇部には刻み目を施す。外面調整は頭部がタテハケ調整、脚部がヨコ方向の叩き調整である。内面調整は頭部に指おさえ痕とタテハケ調整で、脚部はヨコ・ナナメのハケ目調整である。胎土は粗いが 4 mm 以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調は橙～黄橙色を呈する。**12** は受部径 14.4 cm、器高 17.0 cm、脚部径 16.3 cm をはかる。脚部はやや内湾気味で、口唇部には刻み目が施されている。外面調整は頭部にタテハケ調整、脚部に叩き痕跡がわずかに残っている。内面調整は全体的にヨコ・ナナメハケ調整である。胎土は 3 mm 以下の石英・長石・雲母を含む。色調は黄橙色を呈する。**13** は復元受部径約 16.4 cm、残存高 13.8 cm をはかる。受部端部が外側に張り出している。また口唇部には「X」状に刻み目を施す。全体的に磨滅が激しいが、外面調整はタテハケ調整が一部残っている。内面調整は受部にヨコハケ調整が一部残っており、脚部に指おさえ痕がある。胎土は 5 mm 以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調は橙色を呈する。

14 は脊形支脚である。受部径約 8.2 cm、器高 10.4 cm、底径 12.0 cm をはかる。頂部には焼成前の穿孔を有し、ハケ目調整を施す。外面にはナデ調整が認められ、内面には指抑え痕がある。胎土は 6 mm 以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調は灰褐色～橙色を呈する。

(3) 溝

溝 001 (第 10 図、図版 1)

調査区の西側で確認されたおよそ北西一南東方向に延びる大溝である。大溝の多くが調査区外に延びているため全体は把握できないが、確認できる規模として、幅 2.2m、深さ 1.1 ～ 1.5 m をはかる。断面は逆台形～Y 字形をしている。埋土は、底部付近はやや黒色土が混じるが、基本は灰褐色粘質土であり、しまりが非常に強い。北側隣地の第 18 次調査で検出された SD-03 に続く溝である。

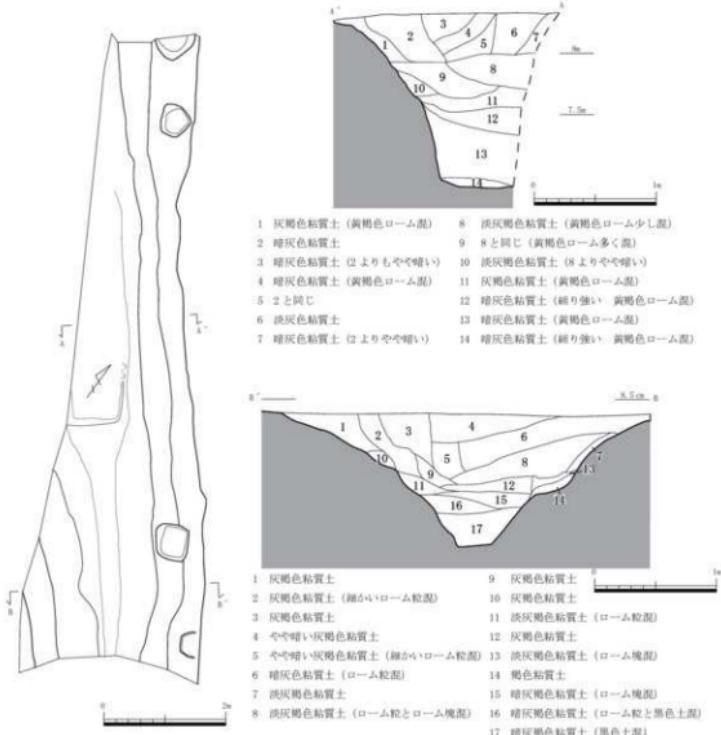
出土遺物 (第 11 図、図版 4) **15** は越州窯の青磁碗である。底径 5.8 cm をはかる。全体的に釉が施されている。胎土は精緻である。色調は胎土が灰色、釉薬が灰オリーブ色を呈する。**16** は高麗系の陶磁である。高台径 5.1 cm をはかる。高台は蛇の目高台である。見込みには目跡が 4 か所ある。胎土は精緻である。色調は胎土が灰色、釉薬が灰白色を呈する。

17 は瓦質の火鉢の口縁部である。破片のため法量は不明である。外面に一条の突帯を巡り、突帯の下に格子状痕跡がある。調整はナデ調整である。胎土は 5 mm 以下の白色粒・赤色粒を含む。色調はぶい黄褐色を呈する。

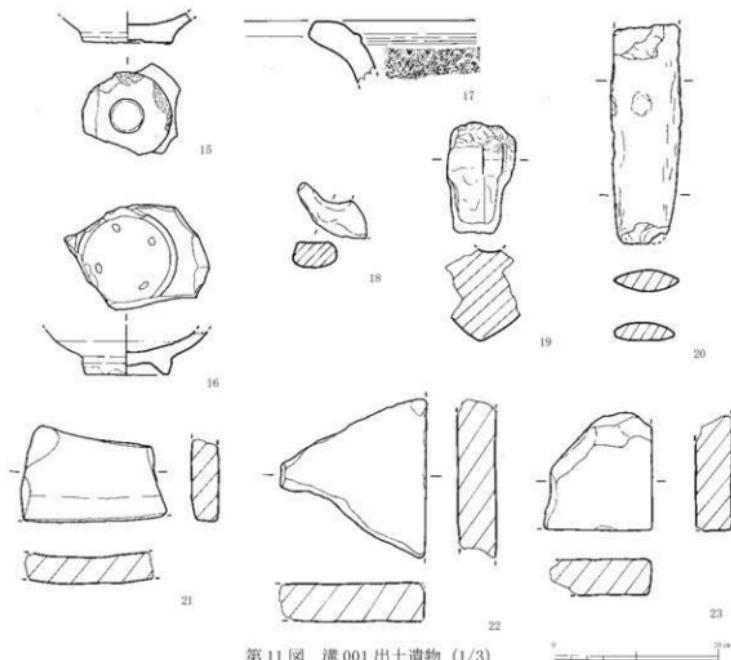
18 は土師器の瓶の取手である。ナデ調整と指おさえ痕が認められる。胎土は 2 mm 以下の石英・長石・雲母を含む。色調は表面は黒色を呈するが、胎土は灰黃褐色を呈する。

19 は羽口である。先端に火を受けた痕跡があり、黒色～灰化色している。送風孔と外面が一部生きている。送風孔は半径 1 cm 程度に復元できる。残存している部分から断面は隅丸方形になる可能性がある。胎土は 2 mm 以下の白色粒子を多く含む。色調は橙色を呈する。

20 は石劍である。最大残存長 13.5 cm、最大残存幅 4.3 cm、厚さ 1.3 cm をはかる。先端はなく折れている。色調は灰色を呈する。



第10図 溝001実測図及び土層断面図 (1/80・1/40)



第11図 溝001出土遺物(1/3)

21は平瓦である。残存長5.8cm、残存幅9.0cm、厚さ1.7cmをはかる。調整は磨滅が激しく不明である。胎土は3mm以下の黒色粒・白色粒を含む。色調は灰色を呈する。22・23は平瓦もしくは熨斗瓦の可能性がある。この2点は接点はないが、色調などから同一個体になる可能性がある。22は最大残存長9.7cm、最大幅8.8cm、厚さ2.4cmをはかる。胎土は精緻で白色微粒子を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。23は最大残存長7.2cm、最大残存幅6.6cm、厚さ2.3cmをはかる。胎土は精緻である。色調はにぶい黄橙色を呈する。

溝002(第12図)

調査区のおよそ中央で確認されたややS字状に蛇行する溝である。北西—南東方向に延びる溝で調査区を横断している。調査区外に延びているため全容は把握できないが、確認できた規模は全長約5m、深さ約36~42cmをはかる。埋土は暗灰褐色粘質土である。図面上では北側隣地の第18次調査で確認されたものにつながると考えられるが、第18次調査では擾乱の溝として報告されており、詳細は不明である。本報告の溝002は擾乱というには埋土が非常にしまっていたことからも溝として報告する。

出土遺物 須恵器片、土師器片、陶磁器片、陶器片などが出土しているが、すべて碎片および小片

で図化することができなかつた。

(4) 貯蔵穴

貯蔵穴 017 (第 13 図)

調査区の東側、堅穴住居 016 の南側から確認された貯蔵穴である。平面形は梢円形を呈しており、規模は長径 100 cm、短径 70 cm、深さ 30 cm をはかる。底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の單一層でしまりが強かつた。

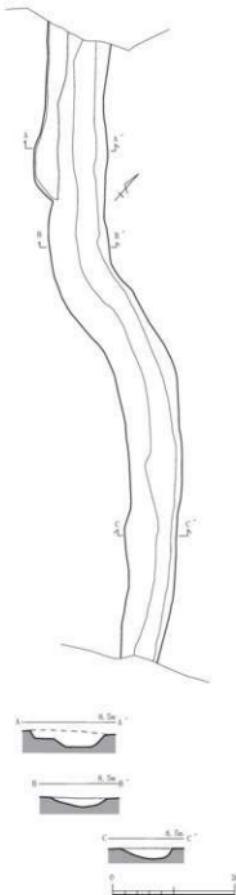
出土遺物 (第 14 図、図版 4) 24 は弥生土器の甕である。接点はないが同一の個体になると考えられるため、同一個体として報告する。口径 36.4 cm、底径 9.0 cm をはかる。底部は平底である。口縁部直下に 1 条の突帯が巡る。全体的に磨滅しており、調整は不明である。胎土は 3 mm 以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色～黄橙色を呈する。25 は弥生土器の鉢である。復元口径 18.6 cm、器高 7.6 cm、復元底径 7.0 cm をはかる。口縁部は肉厚になる。調整は内外ともにナデ調整で、また内面には指おさえ痕が見られる。胎土は 3 mm 以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。26・27 は弥生土器の甕の口縁部片である。両方とも小片で法量は不明である。26 は全体的に磨滅しており、調整は不明である。胎土は 3 mm 以下の石英・長石・雲母を含む。色調は黄褐色を呈する。27 は外面調整がヨコナデ調整で、内面調整が磨滅しており不明である。胎土は 1 mm 以下の白色粒を含む。色調は橙色を呈する。

(5) その他の遺構出土遺物

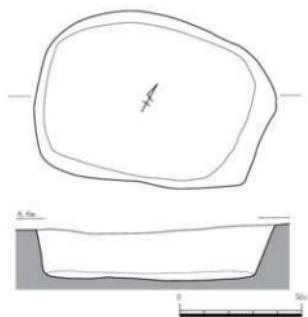
28 は土製の柄杓である。調査区北側で確認された 010 から出土した。残存長 11.3 cm、残存幅 8.1 cm をはかる。調整はナデ調整で指おさえ痕が認められる。胎土は 3 mm 以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調はにぶい黄橙色～にぶい黄褐色を呈する。

29 は弥生土器の高杯である。調査区の東側で確認された 049 から出土した。復元口径 24.2 cm をはかる。口縁部は鋸先口縁である。全体的に磨滅しており調整は不明だが、一部に丹塗りの痕跡あり、内外面ともに丹塗りを施していたと考えられる。胎土は 1 mm 以下の白色粒・雲母を含む。色調は橙色を呈する。

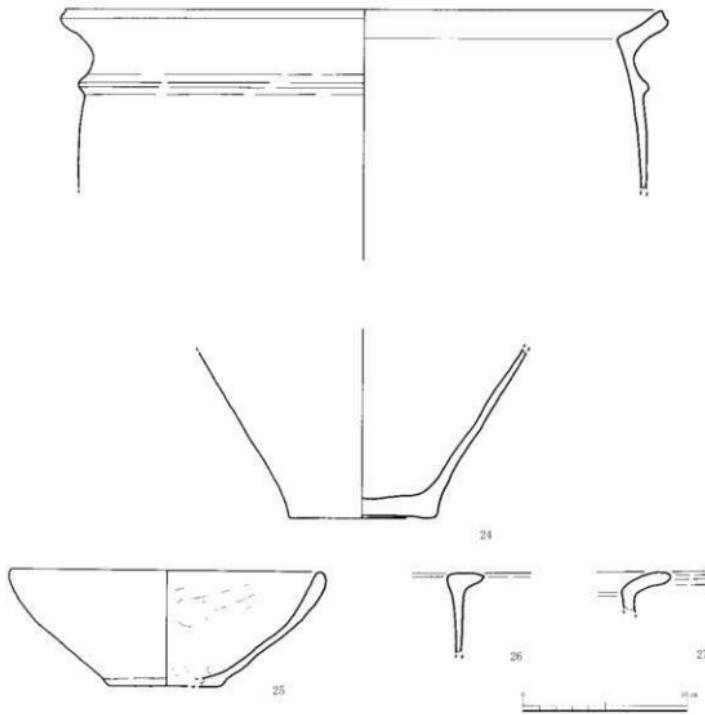
30 はミニチュア土器である。調査区の東側で確認された



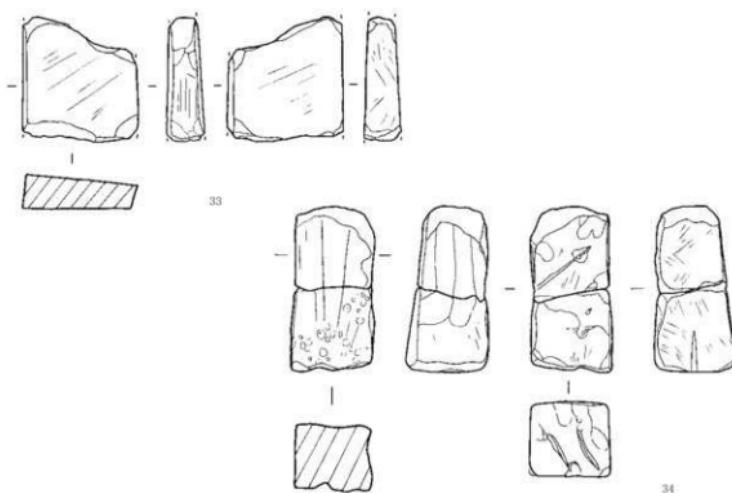
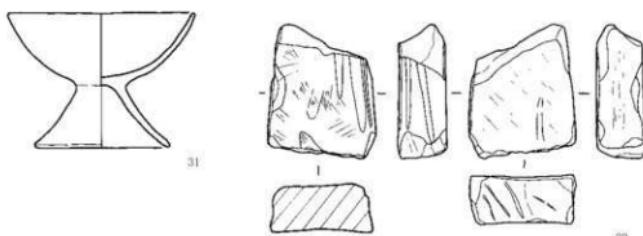
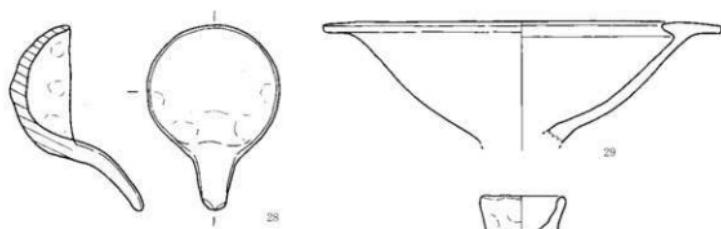
第 12 図 溝 002 実測図 (1/80)



第13図 貯蔵穴017 実測図 (1/20)



第14図 貯蔵穴017 出土遺物 (1/3)



第15図 その他の遺構出土遺物 (1/3)



048・049・050 を一段下げた際に出土した。口径 5.4 cm、器高 3.8 cm、底径 4.6 cm をはかる。全体的にナデ調整を施す。胎土は 3 mm 以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰黄褐色を呈する。

31～34 は遺構検出の際に出土した。31 は土師器の高坏である。復元口径 11.4 cm、器高 8.3 cm、復元脚部径 8.2 cm をはかる。杯部の口縁部は内湾している。全体的に磨滅しており調整は不明である。胎土は精緻だが 3 mm 以下の石英・長石粒を含む。色調は橙色を呈する。32～34 は砥石である。すべて遺構検出の際に出土した。32 は最大残存長 8.2 cm、最大残存幅 6.5 cm、厚さ 3.0 cm をはかる。側面など 4 面に擦痕・条痕などの使用痕が見られる。色調はにぶい黄橙色を呈する。33 は最大残存長 7.7 cm、最大残存幅 7.0 cm、厚さ 2.1 cm をはかる。側面など 4 面に擦痕・条痕などの使用痕が見られる。色調はにぶい黄橙色を呈する。34 は最大残存長 10.1 cm、最大残存幅 5.1 cm、厚さ 4.6 cm をはかる。側面など 4 面に使用痕が見られる。色調はにぶい黄褐色を呈する。

第 3 章　まとめ

今回の調査地点における検出遺構は、掘立柱建物 2 棟、竪穴住居 1 軒、溝 2 条、貯蔵穴 1 基、他柱穴ピット多数であった。遺構の密度は非常に濃かった。検出遺構の時期も弥生時代から中世までと幅広く、当該地に連綿と生活が営まれたことがわかった。以下各遺構についてまとめたい。

掘立柱建物は 2 棟確認された。2 棟とも 1 間 × 2 間の建物であり、主軸方位ほぼあっている。出土遺物は図化できないほど碎片であったが、古墳時代から古代墳の建物と想定したい。ただ他にも柱穴が多く検出されており、建物が建つ可能性はある。

竪穴住居は 1 軒確認された。コの状のベッド状遺構を伴い、土師器の甕が逆さまに据え置かれていた。出土した土師器などから古墳時代前期の竪穴住居と想定される。近接する第 18 次調査でもモコの字のベッド状遺構を伴う古墳時代前期の竪穴住居群が確認されており、関連する住居である可能性は高い。

溝は 2 条確認されており、本調査検出の溝 001 は第 18 次調査での S D-03 につながる。溝 001 は那珂遺跡群などで確認されている 15～16 世紀代の大溝の 1 つである可能性がある。ただ溝 001 出土の遺物は多様かつ少量で時期決定が難しい。一応瓦質の火鉢や図化できなかったが、15 世紀代と思われる青磁碗の口縁部など中世後半頃の遺物も出土していること、また他の大溝と比較的規模なども似通つてことからも時期は中世後半としたい。溝 002 は第 18 次調査では攪乱として報告されているものとつながると想定される。出土遺物が多様かつ少量から時期決定は難しいが、近世の陶器も出土していることから比較的新しい溝である可能性もある。

貯蔵穴は 1 基確認されており、出土した弥生土器から弥生時代中期頃と想定される。弥生時代の明確な遺構はこの貯蔵穴のみであるが、ほかの溝や住居からも弥生土器が出土していることからも他にも弥生時代の遺構はあったと考えられる。

以上のように本調査地点から弥生時代から中世までの遺構・遺物を検出し、連続的に集落が営まれていた様相を確認できた。



(1) I 区調査区全景
(北西から)



(2) II 区調査区全景
(南西から)



(3) III 区調査区全景
(北西から)



(4) 溝 001 断面 A - A'
(北から)



(5) 溝 001 断面 B - B'
(北西から)

図版 2

(6) 壇穴住居 016 全景
(東から)



(7) 壇穴住居 016 土器出土状況
(北東から)



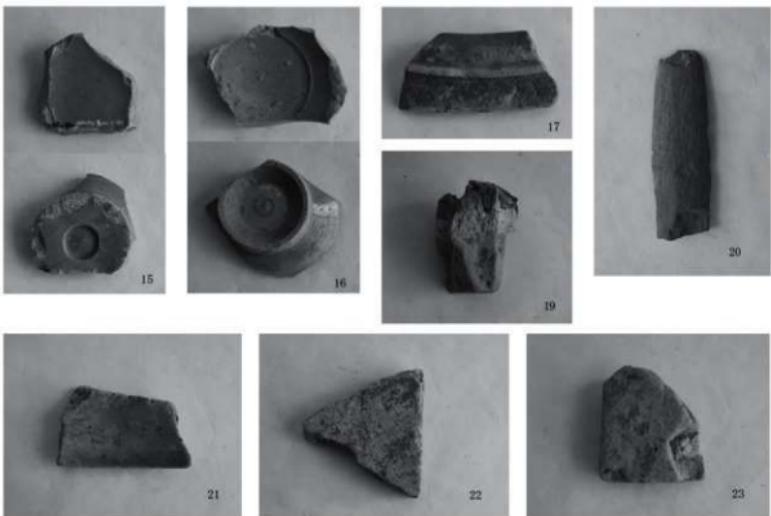
(8) 貯藏穴 017 全景
(北から)





(9) 堪穴住居 016 出土土器

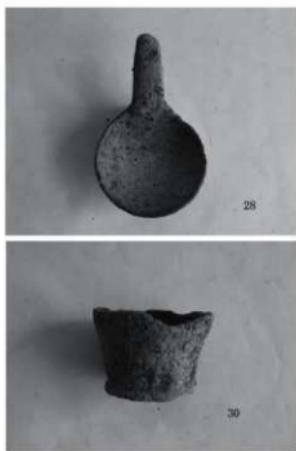
図版 4



(10) 溝 001 出土遺物



(11) 貯藏穴 017 出土遺物



(12) その他の遺構出土遺物

報告書抄録								
ふりがな	なか 83							
書名	那珂 83							
副書名	—那珂遺跡群第172次調査の報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1412集							
編著者名	山本晃平							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2021年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m ²		
なかいせきぐん 那珂遺跡群	ふくおかげんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくとうこうじまち 博多区東光寺町1丁目 400-2, 401	40132	0085	33° 34' 29"	130° 25' 57"	20180213 ~ 20180316	124.94	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
那珂遺跡群 第172次調査	集落	弥生時代～中世	掘立柱建物2軒 溝2条 竪穴住居1軒 貯蔵穴1基	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、土製品	弥生時代～中世にかけての集落跡			
要約	本調査地点は那珂遺跡群の北側に位置する。弥生時代の貯蔵穴1基、古墳時代前期の竪穴住居1基、古代の掘立柱建物2棟、中世以降の溝2条のほか、柱穴・ピット多数を検出した。竪穴住居ではベッド状遺構に土師器甕が逆さまで置かれていた。検出した遺構と遺物から弥生時代から中世まで連続と集落が営まれていた様相が確認された。							

那珂 83

- 那珂遺跡群第172次調査の報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1412集

2021年(令和3年)3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 エース印刷株式会社

福岡市中央区大濠1-6-9

